

一昨年、橋の床板に穴があいて、マスコミをにぎわせたことがあった。その前には、新潟地震で落橋事故が起こり、評論家は、口をきわめて技術者をののしった。また最近では、飛騨川にバスが転落するという大惨事が発生した。報道機関の力をかりるまでもなく、われわれの周囲には、道路自体になんらかの弱点があって、破損または損傷する例が多い。現在の技術水準で、これを防ぐことはむろん可能であろうが、経済が許さない。そこで大切なことは、同じような誤りを繰り返さないことであり、そのためには、こうした事故の内容なり原因について、それぞれの権威者によって解明された結果を、広く技術者一般に周知させる方法がとれないものかと思う。

現在の日本の社会情勢からすれば、それは困難なことであり、場合によっては、前途ある技術者の社会的生命すら失なわせる結果になりかねない。しかし、同じ失敗を繰り返さないためには、技術者は、勇気をもってこうした社会情勢に抵抗を試みてよいと思うのだが、どうであろうか。

昭和15年、当時世界第3位の規模を誇るタコマ吊橋が落橋したとき、アメリカ国民は、その原因の究明をかねて、当初の設計者に再設計を命じたという。その設計者は、見ず知らずの外国の一書生に、具体的に、再設計の問題点と失敗とを説明してくれた。大国民の面目であろう。

道路事業の伸びはすざまじい。一昔前には予想もつかなかったような事業が、着々と具体化されつつあるし、またされようとしている。ただ私は、はなやかな建設にのみ目を奪われて、維持管理の重要性を忘れることのないようにしたいと思う。いいかえれば、維持管理のことを考えた設計施工でなければならないと思う。

道路は生きものである、日々損耗しつつある。その一部は、車による自然消耗であろうが、道路構造の不備によ

る小災害もかなりあるように思う。

ここに、維持段階における技術者の責務と存在価値があり、その経験と反省を、次の建設に活用すべきであろう。極論すれば、新卒の諸君の大半は、まず維持の勉強をしてもらって、その経験をもとに建設に従事してもらったらと思う。こうすれば、技術者の大半が、他の失敗例を活字で読んだ知識としてではなく、身体で覚えた体験として活用できる。

さきに述べた事故原因等の周知と相まって、より合理的で、より健康な道路造りのためには、維持補修技術に対する重要性の認識を、かさねて強調したい。

道路法によれば、道路管理者は、道路を常時良好な状態に保つように維持修繕しなければならない。この点についての国民一般の関心は、他の部門と比較して、最も強いほうであろう。管理に過失があるとする紛争が、あとをたたない。

道路を常時良好な状態に保つための要件は、金と人であろう。金については、為政者なり財政当局の、よりいっそうの理解を望みたい。私はある機関に勤務中、財政難から、道路事業の打ち切りが必要となったとき、ある公共団体の責任者の口から「建設工事を中止しても、公共財産保全の立場から、修繕工事だけは実施してもらいたい」という言葉を聞いたときの感銘を想い出すのであるが、さればとって、技術者が、予算のみを理由に責任を回避することは許されないと思う。

技術者個々の創意工夫とともに、道路技術者全体として、維持補修技術に対する重要性の認識、そのためには、失敗例を、技術雑誌等に公表する勇気と度量とを期待して、この拙文を終りたい。これは決して後向きの姿勢ではない。今日まで先人の努力によって発展してきた技術を、さらに発展飛躍させるためには、たまにはじっくり反省し、考え直してみるのも、必要ではないかと思うのである。

\* 正会員 日本道路公団福岡支社支社長